



企画展

只見町は、日本の自然の中心地  
自然首都・只見



# 守りたい! 只見の野生動植物

—只見町の野生動植物を保護する条例



## はじめに

越後山脈の南東に位置する只見町は、標高1000m前後の山々に囲まれ、尾瀬を水源とする只見川が縦貫しています。山地は多量の降雪により雪食地形が卓越し、そこにはブナ林をはじめとする落葉広葉樹林がモザイク状に成立しており、そうした自然環境がほとんど手つかずの状態で大面積にわたり存在しています。

そして、そこでは豊かな自然環境の存在を象徴するツクノワグマやイヌワシなどをはじめとしたさまざまな野生動植物が生育・生息しています。さらには、人里近くには地域住民の利用により成立した二次林、田畑が存在し、そこにもそうした環境を生育・生息地とする野生動植物が生育・生息しています。これまで只見町の人々はこうしたこの豊かな自然環境や野生動植物の存在を拠り所としてその生活が支えられてきました。しかし、そうした自然の恵みを楽しんできた只見町でも、開発による環境破壊や山野草の盗掘、希少昆虫の採取などが問題となっていました。地域の自然環境や野生動植物が損なわれることは、地域住民の生活基盤が脅かされるということを意味します。こうした自然と地域住民との関係性を将来的に維持し確保するために、自然環境と野生動植物を保護・保全することは地域社会にとって不可欠なことです。

2016年、只見町は「只見町の野生動植物を保護する条例」を制定しました。これは地域の自然環境や野生動植物が地域住民の生活を支える共有財産であり資源であるという視点に立ち、その保護・保全に積極的に取り組むことによって持続可能な天然資源を利活用しながら地域社会の発展を目指すことを目的としています。この条例には、きびしい罰則はありません。あくまで地域の貴重な自然環境と野生動植物、天然資源の保護・保全を図ることの重要性と大切さを地域の人々が自覚し啓発に努める倫理規定であり、そのことに取り組むことを表明した地域的合意文書なのです。

今回の企画展は、只見町の自然環境や生態系の重要性と絶滅の危機にさらされている動植物を紹介するとともに、それを保護・保全していくために制定された「只見町の野生動植物を保護する条例」の内容とその役割について知っていただくために開催するものです。これによって、いささかでもその重要性と必要性を理解していただき、只見町の豊かで美しい自然環境を次世代に引き継いでいく一助となれば幸いです。



# 第1部 只見町の自然環境と野生動植物の現状 そして保護・保全への道のり

ここでは只見町の自然環境と野生動植物、それを基盤とした生活文化の現状を概観し、「只見町の野生動植物を保護する条例」の制定に至る町の自然保護の道のりについて説明します。

## 只見町が誇る自然環境と野生動植物

只見町では、3～4月になると、年間累計約13mにもおよぶ降雪が全層雪崩となって山腹斜面を削り取ります。この多雪と雪崩による攪乱によって、生物多様性の高い只見地域独特の生態系が生み出されました。年間の平均降水量はおよそ2,300mmですが、その56%は降雪によるものです。多量の水はブナ天然林やサワグルミの溪畔林をうるおし、沢水となって狭い谷を流れ下ります。こうして多様で複雑な地形が作られ、それぞれの立地環境に適応した植生が発達しました。

切り立つ尾根にはキタゴヨウが列生し、雪崩が常襲する斜面にはミヤマナラの矮性低木林、斜面下部に堆積した土砂をおおうオオイタドリやナンブアザミからなる雪崩植生、ゆるやかな尾根や谷底の緩斜面にはブナ林が成立します。このように雪食地形とよばれる雪崩の浸食によって形成された急峻な山々は、さまざまな植物群落がパッチ状に成立するモザイク植生となっています。ここには森林生態系に君臨するイヌワシやクマタカなどの猛禽類、ツキノワグマやニホンカモシカなどの大型哺乳類が生息しています。イヌワシは雪崩斜面の裸地や草地を狩場とし、ヒメサユリも同じような環境に自生します。一方、クマタカやクロホオヒゲモウモリ、ツキノワグマ、ニホンカモシカは森林環境を好みます。このほかにもタダミハコネサンショウウオなど地域固有種、希少種、絶滅危惧種が生息しています。

一方、人里付近の山林原野は、人の手が入った二次的植生ですが、外来種は少なく、カタクリ、フクジュソウなど山野草、ノジコやチゴモズなどの希少な鳥類といったほかの地域では失われた野生動植物が普通に見られることが特徴です。さらに、大曾根湿原を代表とした湿原が点在し、伊南川では河川環境の自然度の高さを示す希少樹種ユビソヤナギなどのヤナギ類からなる河畔林も存在します。

多種類の野生動植物が生育・生息し個体数も多いのは、只見地域の複雑な地形とモザイク植生が育んだ多様な自然環境があるからこそといえます。



## 只見町の野生動植物と利用、そして保護・保全

只見地域は雪食地形とモザイク植生という多雪環境に特徴づけられる独特な自然環境を有し、それらはさまざまな生育地や生息地を提供しており、多種多様な動植物の生存を可能にしてきました。只見町の人々は、そうした自然環境や天然資源を拠り所として暮らしてきました。すなわち、発達し成熟した森林は、集落や農耕地を自然災害から守り、豊かな河川水、地下水は、農耕地を潤し、飲料水や生活用水を供給してきました。例えば、田んぼに引く水に困らないように後背地にあるブナ林を「水林」として保護し、木を伐らせませんでした。また、地域住民は、伝統的に集落背後に位置する山林から山野草を採取し、特に、ふんだんに採れるゼンマイは生計の糧となっていました。河川からはイワナやウグイなどを捕獲し、山間地で生活する上での重要なタンパク源となりました。そうした食料はもとより、生活に必要な建設資材、燃料、農用資材、緑肥、日常品の材料などあらゆるものを天然資源に頼ってきました。例えば、咳止めの特效薬としたヤマナシ（オオウラジロノキ）も大切に保護し、その実を採取しました。マタタビやヒロロ（ミヤマカンズゲ）を採取して、ザルやミノ、カゴをつくる伝統技術も残っています。材木運搬用のヤマゾリにはミネバリやハナノキ（アカイタヤ）、除雪用のコーシキにはブナ、臼にはトチノキやケヤキを伐採して材料としました。

このように只見地域の天然資源が人々の生活と文化をこれまで支えてきたといっても過言ではありません。従って、地域の共有財産ともいえる天然資源を代々持続的に利用するためには、乱獲することは許されません。ゼンマイを根絶やしにすることなく採り続けてきたのは、必ず数本残して採るという配慮があったからです。豊かな天然資源とそれを利用する技術が、乱獲や乱開発を防ぎ、自然保護と資源維持に大きく貢献してきたともいえます。

只見地域の豊かで健全な自然環境と生物多様性の存在と、それを持続可能な形で利活用してきた住民の生活文化との関係性は、この地域社会のアイデンティティーです。そのことを将来に持続的に維持、確保していくために、自然環境と生物多様性を地域社会が保護・保全していくことが極めて重要なことと言えます。

### 伝統的な天然資源の利用



左上から：ゼンマイ折り、マタタビつるの採取、ヒロロのミノづくり、春木山（燃料の採取）、投網ぶち、キノコの採取

# 只見町における自然保護の歴史

只見町には、かつてはブナの天然林が里山から奥山まで広がっていました。奥山のほとんどは国有林で、鬱蒼としたブナの森林地帯でした。なかでも布沢川や黒谷川の流域には広大なブナの天然林がありましたが、第2次世界大戦以降、さかんに伐採されました。1967年ころから布沢地区で過度の伐採による水害を心配する声が高まってきました。それが1969年8月12日の集中豪雨による大水害が発生して現実のものとなったのです。以降、国有林のブナ林伐採に対する町民の目はきびしくなります。



ブナ林の伐採中止を訴える活動(布沢)

只見町議会では、1973年に国有林野の保全に関する要望書を前橋営林局に提出、1980年には国有林問題調査特別委員会が町議会に設置され、ブナ林の伐採問題について調査検討がはじまります。1989年、国有林伐採の大幅削減に関する決議を採択、翌年には国有林保全を求めて2,500人分の署名と要望書をもって中央陳情を行います。これらは伐採量を削減させる成果はありましたが、伐採を中止させるまでには至りませんでした。1992年、只見町は布沢川支流のブナ林伐採を止めるため、「恵みの森構想」を策定し、具体的な保護運動に乗り出します。

ブナ林伐採の反対運動に大きな変化が現れたのは、2002年からです。日本野鳥の会南会津支部（現・南会津連合）が、全国の自然団体の協力を得て反対運動をはじめたのです。26,000人を超す署名を集め、林野庁に伐採計画の即時中止を求めました。そのような折、林野庁は、2003年に布沢恵みの森を「郷土の森」に指定します。

2002年から只見町ではブナ林総合学術調査事業を3年間にわたり実施します。これによって町内のブナ林の遺伝的多様性がきわめて高いことや絶滅危惧種のクロホオヒゲコウモリが多数生息していることがわかりました。その成果は、只見町の人々に自信と誇りを与えたのです。2005年には、世界ブナ・サミットを開催し、只見町のブナ林の価値を国内外に発信しました。翌2006年、町では「自然首都・只見」を宣言、同年策定の第6次只見町振興計画で「ブナと生きるまち 雪と暮らすまち」をかかげ、只見町ブナセンターを立ち上げます。

2007年、林野庁は只見町を含む奥会津一帯の国有林を奥会津森林生態系保護地域とし、保護することを決定し、ブナ林の伐採計画は中止となったのです。2011年、福島原発による風評被害と未曾有の大水害というダブルパンチに見舞われた只見町は、その打開策として、自然と人の共存を目指すユネスコエコパークに登録する方針を決断、2年の準備を経て、2014年、只見ユネスコエコパークが誕生しました。それは自然と共存しながら生活してきた只見町の人々が選んだ到達点ともなったのです。



世界ブナサミット(2005年)



「自然首都・只見」宣言(2006年)